

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

歌垣の伝統と現代への継承：
パイ族の查白歌節を事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-12-17 キーワード: 查郎と白妹, 虎場, 赶查白, 舞台公演, 山歌 作成者: 曹, 咏梅, Cao, Yongmei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001298

歌垣の伝統と現代への継承

— プイ族の查白歌節を事例として —

曹 咏梅

一 はじめに

歌垣は古代日本では『万葉集』や『風土記』などに確認でき、東国から九州に至るまでの地域で行われていたことが知られる。中国では紀元前一〇〇〇年に歌われていた『詩経』の国風歌謡に、歌垣の歌と思われる男女の歌が見られる。これらから、男女が集まって歌を掛け合うことは古くから行われていた民俗行事であることが知られる。かつて中国では「歌会」や「歌節」などといわれ、西北や西南地域で盛んに行われていた。現在は

このような行事は、観光化の波に襲われている。以前に筆者が貴州省東南の黎平県岩洞村をベースキャンプとして現地調査を行っていた時に、貴陽から黎平へ向かう途中に凱里近くで香炉山がよく見えていた。形が香炉に似ていることから香炉山と呼ばれる。かつて香炉山では「爬坡節」(山登りの祭)といわれる歌会が数万人規模で行われ、鈴木正崇氏・金丸良子氏や土橋寛氏が一九八三年に実地現地を見たものを書き残している。筆者が岩洞村でトン族の民俗文化を調査していた時期には、香炉山の爬坡節はすでに廃れていた。その後、二〇一五年八月に当時國學院大學教授辰巳正明氏と一緒に岩洞村を訪れようとして

いた時に、香炉山の爬坡節が復活したことを耳にしたので、現地通訳担当の熊幫東氏（苗族）に爬坡節の情報の入手をお願いした。熊氏によると、香炉山の爬坡節は復活したが、男女の対歌（歌掛け）はもう見られないという。その代わりに貴州西南地区のブイ（布依）族の「查白歌節」の情報を入手し、この歌節は現在も行われているとのことであったので、查白歌節の調査へ行くことにした。

ブイ族は中国五十五の少数民族の一つであり、古代の越人、「駱越」の一支である。²一九五三年にブイ族と名付けられている。人口は二〇一〇年第六次全国人口普查によれば約二八七万人であり、主に貴州省の黔南ブイ族苗族自治州、黔西南ブイ族苗族自治州、安顺地区、貴陽市、六盤水市などの地域に居住し、ほかに四川、雲南などにも一部居住している。³ブイ族は自民族の言語を持つが、他の民族のように文字を持っていない。一九五六年に中国政府がラテン文字を用いたブイ文字を作って推し進めている。ブイ族の查白歌節は貴州省西南地区、興義市頂効鎮查白村で行われる伝統的な民俗行事であり、民間では「趕查白」（查白場に出かける）といわれたが、一九八二年に興義県政府（当時は県）が「查白歌節」と命名し、今日ではこの名称が定着している。⁴查白歌節は二〇〇六年に国家級無

形文化遺産に登録されている。⁵

こうした歌会では歌の掛け合いや踊りが最も重要な内容であり、それに加えて参加者が持参した飲食も重要な意味を持っていると考えられるが、現代の歌会では歌舞や飲食以外にも色々な要素を含めている。また現代社会では多くの民俗行事が観光に利用されているように、中国でも伝統的な民俗行事が観光済のための観光資源として活用されながら継承されている。本稿では、二〇一五年八月四～五日に現地調査を行った查白歌節を事例として、歌垣の現代的形態と変遷などについて考えてみたい。

二 查白歌節の由来

ブイ族の查白歌節は毎年旧暦六月二十一日～二十三日に貴州省興義市頂効鎮查白村の虎場（虎場壩ともいうが、今は查白場という）で行われている。興義市は貴州省の西南に位置し、西は雲南省、南は広西チワン族自治区に隣接している。貴州省の省都貴陽から雲南、広西にいたるまで必ず通る場所であるため、三省交通の要衝ともいわれている。それゆえ查白歌節は貴州省の人だけではなく、雲南や広西からも参加者が集まり、またブ

イ族だけではなく、チワン族、苗族、イ族、漢族などの民族が参加している。查白村は興義市から約二十五キロぐらい離れている。查白村は海拔が一二九〇メートルあり、村の前後は山に囲まれている。查白村は漢族とブイ族が雑居し、人口は約三九〇〇人で、人口の六割がブイ族である。查白歌節がいつから始まったかは文献記録がないため不明であるが、その由来について現地ではある伝説が伝わっている。ここでは『布依族文学史』に収録された「查白場」を以下に引用する。

昔興義の虎場一带には森が広がり、虎と狼が群れをなして生きていた。ある日、ブイ族の白妹という娘が山に柴刈りに出かけた時に虎に遇ってしまった。虎が彼女に飛びかかろうとした危機一髪の際に、查郎が矢を発射して虎を殺し、彼女を救った。これがきっかけで二人は知り合い、その後歌場でも何回か会ううちに恋人になった。查郎と白妹の愛は純粋で誠であるが、土地の悪辣な権力者李山官は二人を引き離そうとした。李山官はずっと前から白妹の美貌に惚れて、彼女を自分の妾にしようとした。白妹は李山官を固く断り、先に查郎と婚礼を挙げた。李山官はこれを知り、手下を連れて白妹を奪い、查郎を縄で縛った。知勇を兼ね備えた查郎は隙を見て逃げ帰り、村人と一緒に調虎離山の

計を立てて白妹を救い出した。だが、不幸なことに、查郎はまた捕まえられ、李山官に殺されてしまった。白妹は查郎が亡くなったことを聞いてひどく悲しみ、查郎の遺骨を親に託して、それから李山官の屋敷に火を放ち、自分もその火の海に飛び込んでいった。查郎と白妹の忠実な愛情は蓬萊仙島の碧雲歌仙を感動させた。歌仙が祥雲に乗って仙人坂に至り、火の海を指さすと、一對の白鶴が火の海から飛び立ち、雲の中へ飛んでいった。それ以来、人々はこの夫婦を記念するために、虎場を查白場と名付け、白妹が殉死した六月二十一日を一年に一度の歌節と決めた。⁷⁾

この歌節に関わる現地の人からの聞き取りによっても伝説の内容は凡そ同じで、查郎と白妹を記念する行事だという。ブイ族は文字がないため、この由来は口で伝えられてきた。そのため、二十世紀八十年代以前までは中国の学界ではあまり知られていなく、八十年代初めに羅光漢、羅汎河、黄世賢、黄正書らが整理した「查白歌節の来歴」が雑誌『南風』に発表されて以来、民俗学界からも注目を集め、多くの新聞や書籍もこの故事伝説を収録するようになった。⁸⁾「查白歌節の来歴」は長編の民間故事伝説で、散文の記述とともに查郎と白妹が掛け合う歌も挿入され、さらに詳細に記されている。

ただ、查白の故事は一つではなく、查白が一人の女性を指す伝説も伝わっている。叙事長歌「查白」では查白は女性の名前であり、祭司の経書に見られる神霊である。查白はブイ族の女性英雄查白として登場し、夫になる阿厄と愛の自由のために封建社会の旧勢力と勇敢に戦ってついに結ばれた。さらに二人は村人を率いて五匹の虎を退治し神となったという故事も伝えられている。⁹⁾

呉興明氏は摩公(ブイ族祭司、布摩(ブモ))の経書に記録されている查白に関する伝説を二つ紹介している。興義市巴結鎮打幫村の摩公余延年の手写本経書には一人神である查白の話が記録され、その話は次のようである。

昔々ブイ族の祖先は火がなかったので生のものを食べて過ごし、猛獣にも常に襲われて、人々は死んだり逃げたりして、最後に残った人たちが今日の查白村に逃げてきた。村には查白という若者がいて、野獣と戦うためには火種が必須だと考え、幾つもの山河を歩き回りついにある洞窟で火種を見つけたが、火種は悪竜に見守られていた。查白は計略を立て、牛角でラッパを作り龍吟の音を吹き、悪竜を誘き出した。火種を取り、道端にある茅草で火種を保管する道具を作った。その後も猛獣がまだいたため、弓を設置し

た機械措置や落とし穴を發明し、村の周囲に設置した。それ以後人々は猛獣に襲われることはなく、普通に暮らし始めた。查白が死んでから、天帝は人々のために大きく貢献した彼をこの地域の神に任命したという。¹⁰⁾

この故事に対して冊亨県坡妹鎮那浪村の摩公韋仕桓の経書に記されているのは、悪魔である查白の話である。查白は上古時代に生まれた悪魔であり、全盛期には世間の多くの邪神を駆使していた。ついに天神が查白の悪行を見かねて助けることを決め、三日三晩戦ってやつと征服したが、彼を完全に消滅することはできなかった。「趕查白」のこの日は勝利を祝うためであり、查白を追い出すことに成功した意味も含まれているという(呉興明氏「前掲論文」)。

叙事長歌「查白」では查白が経書に見られる神であることを示している。ここでは查白と阿厄の愛情物語を語りながら、村人のために戦って犠牲となった英雄物語をも描いている。查白は恋愛神でありながら英雄神でもある。この叙事長歌も查白歌節の由来としての基本的要素を整えており、おそらく韻文の形で一部の人のみに伝承されていたと思われる。また、摩公余延年の経書にある查白の話は、查白村に到った祖先の話であり、查白は人々のために戦った英雄神、祖先神なのである。伝統的

な祭祀の時に摩公が查白神を招き、次に三国時代の孟獲を招くということから、摩公は神が生きていた時代を三国時代以前と考えているようである（呉興明氏「前掲論文」）。悪神の查白の話も摩公の経書に記されていることから、悪神を追い払う儀式か何らかの祭祀活動と関連すると推定される。だが、善神や悪神としての查白は摩公の経書のみ伝わっているもので、現地ではあまり広く知られていない。民間で広く伝わっているのは查郎と白妹の愛情物語で、現地の人もこの二人を記念するために歌掛けを行っていると考えている。少数民族の歌垣（歌会）の起源伝説には結ばれなかった男女が愛のために殉死した物語が多く語られている。查郎と白妹の物語も歌垣の起源伝説でよく見られる話型で、民間では查郎と白妹の愛情物語が一般に受け入れやすかったのではないかと思われる。

以上のように、「查白」が查郎と白妹の男女の神、また一人神として恋愛神、英雄神、祖先神、悪神の姿で伝えられているのも、查白歌節が神の祭祀活動と結びついて形成されたことを意味し、「人々が神と古代英雄人物を祭祀する時に歌掛けなどの文化娯楽活動も展開され、次第に查白歌節が形成された」と考えられる。「查白」という地名は清代の『興義府志』地理志卷九「屯寨」に「黄坪营屯寨凡一百十有五」に「查白」が確認

できる。¹²⁾ 查白村には查氏一族の祖先查朝奉の墓があり、年代は「乾隆五十五年歲次庚戌季秋月望四日谷旦」と、一七九〇年九月十九日に建てられ、墓碑に「生基建造虎場旁…」とある。¹³⁾ ここから「虎場」という地名が乾隆時代にすでに存在したことが確認できる。呉興明氏は虎場壩の近くには早くも元代から古代駅道が整備され、この駅道によって四方八方から物品が集まり、商品の貿易が発展し、定期的に市が開かれるようになったという。¹⁴⁾ 『興義府志』地理志卷十「場市」には「鼠場」、「竜場」、「馬場」などと多くの市が記され、たとえば「竜場」は「按竜場逢辰日為場期」とあり、辰の日に開かれる市のことをいう（前掲書『興義府志』）。『興義府志』に「虎場」という市は記されていないが、本来は寅の日に開かれる市のことを指し、市の名が次第に地名として定着したと思われる。民間では「趕查白」という市に出かけることをいう。查白歌節は民間では「趕查白」といわれ、それは查白場に出かけることを意味し、定期的に行われる市に出かけることから歌掛けに行くことへと変化したと思われる。このように、查白歌節は神の祭祀活動や定期的に市が開かれた「虎場」の地理的要素などが結合し、次第に形成され、また市と強く結びついて形成されていることが知られる。

三 查白歌節の内容

查白歌節の内容については、二〇一五年八月に行った現地調査を中心に見てみたい。八月三日には辰巳教授と共に貴陽に到り、翌朝現地のガイド熊幫東氏の車で貴陽のホテルから出発し、查白村へと向かった。貴陽から查白村までは数時間かかり、午後には查白村に到着した。村に入る道路は広くなく、村に近づくと車一台しか通れない道路であった。この日は車両制限がなかったため、車で村の中へ入った。村の中心に查白場（虎場）といわれる広場があり、広場の片隅に舞台が設置されていた。舞台では翌日の公演に向けて楽器の演奏や踊りのリハーサルをしていた。舞台から離れた所には人々が休憩する涼亭があり、翌日ここで山歌を掛け合う人々に出会った。現地の人に聞き取り調査をした後、夕方村から出る時に、查白村で大渋滞に巻き込まれた。翌日出店する人たちが物資を運んでいたために、渋滞を引き起こしたのである。

翌日歌節が開催される日には朝から雨が降っていた。現地の人のお話によれば、この日は必ず雨が降るといふ。查郎と白妹が歌節に参加するために雲に乗って来たので、その雲が雨になっ

たという。この日は查白村に入る道路は車両規制をしたため、指定された場所に駐車し、そこから查白村まで三キロ程度の距離を歩いた。他所から来た人もみな查白村に入る所から歩いて向かっていた。今は以前と違って、遠方の人はみな車で来るといふ。村の会場に向かう途中、道路の両側には売店が並び、麺類、串焼き、ピンク色に染めた卵、五色糯米ご飯、お菓子、玩具など色々なものが売られていた。村に近づくと「狗肉」と書いた看板が目立ち、犬肉を売る店が多くあった。このように市が立つのは、歌節が開かれるから市が立つ場合と、市が立つから歌節が開かれる場合とがあり、この通りの市は前者により立った市である。查白場に到着してまもなく舞台上には当日の司会者が登場し挨拶があり、公演が始まった。舞台ではダンスや歌など色々な演目が上演され、大音量の音楽が流されていた。観衆は舞台の前に立って見ていた。

現在の查白歌節の主な内容は、查白墳（查白の墳墓）の前での祭祀、犬肉を食べる、查白井の水を飲む、男女が歌を掛け合うことである。村には查郎と白妹が合葬された查白墳と伝えられている墓があり、朝その墓の前で祭祀を行う。私たちが查白村に到った時に、祭祀はすでに終わっていた。ただ、この祭祀はプロ（布摩）と寨老が司り、他所の者は参加することはでき

ない。参加が可能なのは查姓の子孫と查白村の村民のみである。供え物を奉ってお礼が終わると、最後にプモ（布摩）が查郎と白妹の伝説歌謡を唱えるという。¹⁵⁾

犬肉を食べることは、現地の人の話によれば伝説と関係があるという。それによれば、查郎が虎を殺して白妹を救った話がつぎに周囲に広がり、その話を聞いた村民たちが虎場に集まってきたので、查郎は虎肉の鍋を作ってもてなしたが、虎肉が足りなくなつて犬肉や牛肉を加えて作つた。人々はこの肉のスープを飲んでから体の病が治つたという。それ以来、この日に必ず犬肉を食べるようになつたといひ、現地では犬肉を食べると体が丈夫になり、病を取り除くことができると信じられている。なお、廟への供犠を「献」といひが、『説文』によれば「宗廟大名羹献。犬肥者以献之」とある。肥えた犬は羹の肉として宗廟に献じられていたのである。犬肉を食べることも祭祀と関わる可能性が高く、これについては今後さらに考察していきたい。

查白井は查白場から少し離れた所にある。井戸は立派な建物に囲まれ、壁一面の下に井戸水が流れる水道管をつけ、そこから井戸水が流出していた。その建物の中には查郎と白妹の塑像が立ててある。現地の人はこの井戸水を聖水とみなし、病や災いをなくすことができると信じている。この聖水を飲むことも

伝説と関わり、現地の人の話によれば查郎が虎肉の鍋を作る時にこの井戸の水を使ったことによるといふ。

歌節で最も重要な内容は歌の掛け合ひである。しかし、現在は舞台公演が主になり、観光化の波もこのような所に現れていった。観衆は多くいたものの歌を掛け合う人たちにすぐには出会えなかつた。歌節での歌掛けは、本来は参加者の中から自然発生的に成立するものであつたから、それを待つしかない。舞台公演が始まつてから人々が座つてゐる涼亭へ行き、そこに集つてゐるプイ族の民族衣装を着た五人の女性たちに声を掛けてみた。「どこから来たか、歌は歌えるか」といふ問いに、傍にいた二十代の若い男性が彼らはみな貞豊県から来ていて、自分は五人連れの女子の中の息子であるといふ。そこで男性に歌を歌えるかを聞くと、自分は歌を学んだことがなく歌えないが、自分の母は村では有名な歌手であるといふ。そこで歌を歌うことを頼んだら山歌（民間歌謡）を歌つてくれた。ただ、彼女たちの歌う歌は現地の方言で歌われ、標準中国語とはかけ離れて、筆者もよく聞き取れない。息子がこの山歌を聞いて「私たちは遠くから来て、今日縁があつてここで山歌を歌う」といふ内容であると教えてくれた。これは挨拶の歌である。続いて、プイ族の歌をプイ語で歌つてほしいと頼んだら、困つた表情をして

すぐに歌い出さなかった。その理由を尋ねると、プイ語は話せるが普段はプイ語で歌を歌うことはなく、歌は現地の中国語で歌ってきたという。おそらく、女性たちは相談したのであろう。暫くしてプイ語で「私たち男女は出会い、気に入ったら、静かな所へ行き歌い続けましょう」という内容の歌を歌ってくれた。これはプイ語での山歌であるという。

プイ族の中年女性たちが歌い始めたことから、周りに多くの人が集まってきた。そこに羅方洪氏ら一行も来られて、同行した人の中に村で有名な歌手が参加していることを教えられた。晴隆県から来た羅方洪氏は当時未婚で、恋人を見つげるために歌節に来たという。彼は小さい時から村の歌の先生に歌を習い、今は自分で歌を創作することができ、歌のノートが数冊あるという。羅方洪氏が先ほどのプイ族の女性たちに山歌を歌い掛けたところ、女性たちは誰も応じずに黙っていた。女性たちが黙っていた理由は、羅氏の歌と自分たちの歌とでは曲調が違うという。それにより歌い返すことはできないのだという。その時、人だかりの中から四十代と思われる二人の女性が出てきて、羅氏の歌に歌い返せるといい、すぐに歌い出した。その後途中からもう一人の女性が加わり、羅方洪氏と三人の中年女性との掛け合いが始まった。女性たちは盤県から来て、羅氏とは初めて

出会い、お互いに知らない人同士である。羅方洪氏がこの時に歌い出した歌は挨拶の歌であり、内容は以下のようである。

唱着山歌把妹逗 山歌を歌い妹をからかう、

問妹抬頭不抬頭 妹に聞く、頭を上げるか上げないか、

有情有意抬頭看 気があれば頭をあげて見てください、

無情無意把頭鉤 気がなければ頭を下に向いてください。

羅方洪氏によれば、歌を掛け合う時の歌は山歌といい、山歌は「山歌調」という曲調で現地の中国語で歌うという。山歌は七言の四句から一首になり、一句は七言であるが、一句目は必ずしも七言ではなくてもよく、三言の場合もあるという。また一句目、二句目、四句目で押韻するという。この歌でいうと「逗」「頭」「鉤」で韻を踏んでいる。山歌は「開排歌」(挨拶の歌)から始まり、次に「試探」(相手の心を探る)の段階の歌を歌うが、ここでは相手をからかったり、冗談を歌ったりする時もあるという。次に「贊美」(相手を褒める)の歌を歌い、そこから感情が発展すれば「相愛」(互いに愛し合う)や「熱恋」(熱烈に愛し合う)の歌を歌い、最後は「分離」(別れる)の歌を歌って別れるという。ただし、現場で歌を掛け合う場合は必ずしもこの手順通りにすべて歌うのではなく、融通性があり、臨機応変に対応し、最終的には歌の場で恋人関係になることを目的と

しているという⁽¹⁷⁾。このように、山歌は一連の恋愛の手順を踏んで歌われるのだという。これは辰巳正明氏のいう「歌路」(歌の流れ)に沿って歌が展開されていることが知られる⁽¹⁸⁾。查白歌節で歌われる山歌の手順について、『中国節日誌・查白歌節』では「初識」(初めて会う)、「試探」(相手の心を探る)、「賛美」(相手を褒める)、「熱恋」(熱烈に愛し合う)、「決心」(愛を誓う)、「相思」(互いに家に帰った状況を想像し、相手を恋しく思う)、「逃婚」(駆け落ちをする)、「分別」(別れる)と説明している。プイ族の婚姻は二十世紀八十年代以前は恋愛は自由であるが、結婚は「父母の命、媒酌の言」に従い自分で決められなかったという⁽¹⁹⁾。駆け落ちの歌は、結婚が自由にできなかった時代背景の下で形成されたと思われる。查白歌節で歌われる曲調は「山歌調」のほかに「妹調」、「浪哨調」、「古歌調」があり、「妹調」は山歌調の変体で、青年男女が野外で出会ってから一対一で心を交わす歌を掛け合う時に使われる曲調で、一首の歌は大体四〜八句からなる。「浪哨調」は恋愛をする時にプイ語で歌う伝統的な曲調で、一首の歌は四句からなる。「古歌調」はプイ族伝統の最も古い曲調で、民俗活動の中で広く使われ、歌の長短も様々であるという(前掲書『中国節日誌・查白歌節』)。現地の人によれば、查白歌節では一般に山歌を歌い、山歌の曲

調を多く使うという。羅方洪氏の歌に歌い返せなかった貞豊県から来た女性たちは、おそらく「山歌調」以外の曲調を使っていたと思われる。曲調を異にすれば、当然ながら歌の掛け合いは不可能である。

羅方洪氏と三人の女性との掛け合いは「試探」の段階まで展開し、恋人関係には至ってなかったという。羅氏によれば、ある「テーマ」をめぐって恋歌を掛け合う場合もあるという。たとえば、「竹」をテーマにすると以下のように歌が展開するといふ。

男：妹家門口有竜竹	妹の家の門前には竜竹があり、
風吹竹葉兩面綠	風が吹き竹葉の両面は青く、
修妹不得一家走	妹と家族になることができず
妹說想哭不想哭	妹よ言ってください、泣きたくないか。
女：竹葉青	竹葉は青く、

摘片竹葉來遮陰	竹葉を一枚摘み日陰を作り、
扯片竹葉來写字	竹葉を一枚むしり取り字を書き、
筆筆寫到老表心	一画一画兄の心を書く ⁽²⁰⁾ 。

こうして「竹」をテーマとしながら歌い継がれるが、内容は相手へ恋を告白し、男女の恋愛が展開され、日本の奄美歌謡に見られる歌流れと相通じることが知られる⁽²¹⁾。

昼食後に查白場へ行くと、歌声がひとときわ鳴り響いている所があった。五十代の女性と四十代の男性が歌を掛け合っていて、すでに周りには観衆が多く集まっていた。二人は小型のスピーカーについたマイクを持って現地中国語で山歌を掛け合っていた。暫くやりとりをした後、男性が少し考えてから歌い返す場面が何回かあった。その後、女性の歌が終わると、男性は行き詰まったのか笑いながら中国語で「再也不能唱了（もうこれ以上歌えません）」と言った。すると、女性の隣に座って歌を聞いていた年配の男性が突然歌い出し、女性の歌に答え、そこからこの二人の掛け合いが始まった。女性は興仁県から来た王興梅氏（当時五十三歳）、男性は興仁県から来た蔣開明氏（当時七十歳）である。二人はお互い見知らぬ人同士で、ここで初めて出会ったという。二人とも小型のスピーカーを持参していたが、これは舞台音楽の音量が大きくて相手の歌声がよく聞き取れないため、小型のスピーカーを持参したのだという。一人は、歌の相手を見つけて山歌を掛け合って楽しむためにこの歌節に来たという。

舞台ではすでに午後の部の公演が始まっていた。午後には、最初に見かけた中年女性らとほかの男性グループが向かい合って座り、歌を掛け合っていた。また座っている女性五名の前に



【小型スピーカーを持参して山歌を掛け合う人たち】

男性五名が向かい立って歌を掛け合っているグループもいたが、歌はあまり続かなかった。以上のように、查白場の舞台で色々な演目上演される中、その周りでは自然発生的に山歌を掛け合うグループが存在していたのである。舞台の公演とは別に、その周辺にかつての歌掛けが続いていたのである。

四 查白歌節の変容と伝承

查白歌節は民間では「趕查白」といわれたが、その名称も「查白歌節」に変わり、内容も時代とともに変容してきた。『中国節日誌・查白歌節』では一九五〇年以後の変遷について、主に以下の三段階に分けて説明している。

- 1 民間主導、自主自発の段階（一九五〇～一九七二年）
- 2 制限、抑圧される段階（二十世紀七十年代）
- 3 政府参与——政府主導——政府組織・民間自主（一九七〇年から今に至る）^②

一九五〇年から二十世紀七十年代は查白村が辺鄙な地に位置していたため、政治運動の影響は少なく、「趕查白」の日が近づくと村人は布団を洗濯し、五色糯米ご飯、犬肉や羊肉などの食べ物を用意し客を迎える準備をし、当日には查白場の近くや、

付近の野山、田んぼの畦などからは男女の歌掛けの音が響いたという。二十世紀七十年代は極「左」思想の影響で「趕查白」の民間活動は制限されたという。二十世紀の七十年代末から政府が参与し始めるが、七十年代末から一九八三年まで政府は主に資金面と活動組織の面で支援し、一九八四から二〇〇〇年までは政府が主催者になって大型文芸活動を行うようになり、二〇一〇年からは無形文化遺産を保護することで政府側は主導から引導に変わり、頂効開発区と查白村委員会が共同主催で行うようになったという（前掲書『中国節日誌・查白歌節』）。政府はこの伝統行事を観光資源として活かし、地域経済の発展と伝統行事の保護と伝承を図ったと思われる。しかし、政府がこの行事に参与、主導してから大型の文芸活動に変わり、伝統行事の形態が全国一律の傾向を示し、民族の行事は大きく変化した。山歌の掛け合いは舞台上演する演目となり、人々は舞台公演を楽しむと同時に、聖水を飲み、犬肉を食べて、健康と病氣平癒を祈願する。商売人にとっては商売のチャンスであり、観光客にとってはブイ族の民俗文化に触れて楽しむ機会である。このように查白歌節は現代社会の需要に符合する現代的複合型の祝祭日になっている。

現地の人によれば、以前は交通が不便のため近隣の人も遠方

の人もみな歩いて查白村まで来て、昼は歌を掛け合い、夜は查白村の親戚や友人の家に泊まってそこで続けて歌を掛け合ったという。查白村に親戚や友人がいない人は知らない村人の家に泊まって、「趕查白」が終わるまで村にいたという。近年は生活がよくなり、遠くから来る人は殆ど車で来るようになった²³。実は、羅方洪氏らや貞豊県からきたプイ族の女性たちも車で来ていて午後には帰るといふ。かつては昼だけではなく、夜は村人の家が歌の場となり歌の掛け合いが続いたが、この光景は今ではもう見られなくなつたと思われる。また、当日歌を歌っていた人たちは、中年か老年で、若い人はあまり見られなかつた。羅方洪氏は、村の若者は学校や出稼ぎに行き、村には子どもや老人しかいなく、歌が歌える人があまりいないのだという。これはプイ族だけではなく、他の民族も抱える問題である。黔西南人民政府のホームページには「查白歌節」を紹介する文章があり、その最後に、

二十世紀九十年代中期以後、社会経済の発展や民族文化の交流と融合に伴い、人々の文化生活も益々豊富になり、审美意識も絶えず変化し、人々の伝統観念も絶えず変化した。查白村及び周辺地区のプイ族の言語は次第に消失し、プイ語で交流し歌える人は多く見られなくなり、プイ族の民俗

も衰えつつある。そのうえプイ族村の「摩公」が歳を取り亡くなり、祭祀活動も益々少なくなり、查白歌節も危機に瀕している²⁴。

とある。一九九〇年代中期から中国では出稼ぎブームが起きて、多くの若者が出稼ぎに行くようになり、プイ族だけではなく、多くの少数民族の歌文化が存続の危機にさらされていた。こうした状況の中で自民族の伝統文化を保護し継承していくために、查白歌節は二〇〇五年に貴州省第一次無形文化遺産に登録され、二〇〇六年には国家級無形文化遺産に登録された²⁵。二〇一九年十一月には「国家級無形文化遺産代表性項目保護單位名簿」が公布され、「興義市文化館」が查白歌節の保護單位に認定され、二〇二三年十月には保護單位の査定に合格している²⁶。

政府が参与、主導してから查白歌節は政府に保護され、毎年開催されるようになり、伝承の危機は免れたと思われる。二〇一六年以降は查白村の川辺に水中舞台が設置され、そこで大型の舞台公演が行われるようになった²⁷。二〇一八年は查白村の水中舞台で「二〇一八查白歌節プイ山歌大会」が開催され、貴州省内外の二十五組の歌隊が大会に参加し、歌節に集まった人は数万人に至つたという²⁸。コロナが流行ってから、二〇二〇年に義竜新区劇場で初めてネットライブ配信の形で開催されて

から、二〇二二年、二〇二三年もネットライブ配信の形で開催され、二〇二〇年は三十四組の歌隊が参加し、アクセス数が一九・四五万人に達し、二〇二一年は四十数組の歌隊が参加し、観客が十四万人に達したという。⁽²⁰⁾ 二〇二三年は『黔西南日報』によれば、主会場で公演活動が開催される以外に、副会場も設置され、そこでは山歌争奪戦、ダンス大会、無形文化の展示、民間技艺大会などの活動が行われ、「グループで来る観光客以外にも、今年の查白歌節には多くのインフルエンサーが訪れる観光スポットとなり、スマホでこの活動の素晴らしい瞬間と震撼する場面を記録し、動画撮影やライブ配信の形で多くの人々にこの活動を知らしめ、黔西南を紹介し宣伝する役割を果たした」とある。⁽³⁰⁾ 二〇二四年は『黔西南日報』によれば、七月二十六日に開催され、太鼓や山歌対唱、踊りなどの演目が上演され、四川、広西、雲南からの観光客が多く訪れ、七、八万人が集まったという。⁽³¹⁾

以上のように近年も毎年欠かさず開催され、規模は大きくなり、観光客も数万人規模で集まるようになってきている。コロナ禍で開催されたオンライン上のライブ配信形式は、現代社会の新たな歌節の形態である。山歌は大会の形式や舞台上演の形で舞台化されているが、查白歌節という行事自体は様々な活動が加

わり、また新聞やテレビ、インターネット、SNSなどの媒体によって広く知られるようになり、年々多くの観光客を引き寄せている。

おわりに

民間で「趕查白」といわれてきた歌掛けの行事は、本来は村落の祭祀活動として行われていた伝統行事であったが、政府の参与とともに「查白歌節」と命名され、今は政府主導、引導の下で毎年欠かさず開催されている。查白歌節は現地の伝説によれば、查郎と白妹を記念するために行う祭祀行事である。興義市は貴州、雲南、広西の三省交通の要衝といわれ、貴陽から雲南、広西に至るまで必ず通過する地点である。查白村の近くには古代駅道が整備され、古代駅道は查白村と外部を連結する通路であり、これはまた古代商人たちが必ず通る道でもある。查白村には自然と貴州、雲南、広西の物品が集まり、交易する場として機能していたと思われる。また「虎場」は查郎と白妹の伝説にも伝えられ、古くからあった場所と思われるが、これは本来寅の日に開かれる市の名称と考えられる。查白村の地理的要素から定期的に市が開かれ、これが男女の神を祭る歌掛けの

行事と結びついて「赶查白」が形成されたと思われる。

しかし、民間で「赶查白」といわれた民俗行事が古くからの形のまま今まで伝えられてきたとは思えない。この民俗行事も時代とともに創造と発展を経て今に至っている。現代の查白歌節は大型舞台公演や山歌大会の形で継承され、山歌の対唱は舞台上で上演される演目になっている。つまり、查白歌節は舞台芸術が主流となり、自然発生の男女の歌掛けは副次的に存在し、珍しい光景になっている。查白歌節に関連する記事を見ると、二〇一六年の記事には男女のグループによる歌掛けの写真が載せられ、二〇一八年の記事には男女の歌掛けの声が聞こえたことと記され、⁽³²⁾ 僅かに存在することが確認できる。このように現代社会の查白歌節は舞台公演の鑑賞とともに、健康祈願や商売、文化交流をする日であり、主催者が見せるために用意されたブイ族の文化に触れて、食べて楽しむ娯楽性の強い現代的複合型の祝祭日になり変わっている。查白村には查白場、查白墳、查白井以外にも查白橋、查白河、查白洞など「查白」を冠した場所が多くあり、これらは查白歌節とともに創り出され、今後観光スポットになることは容易に想像できる。

現代社会の查白歌節は観光化とともに創造され、変容した行事であるが、現代的要素を多く表しているのは不可避な現象で

あると思われる。民俗行事も時代とともに創造と発展を経て今に至っており、かつての村落主導、自然発生の「赶查白」を復元することは不可能となっている。そうすると、地元政府の主導の下で歌節文化を継承していくなかで、山歌の伝承、歌手の育成、ブイ語の普及などが課題として残ると思う。余未人氏は「現在各級の政府が主催する民族行事を見ると、「現代的」要素が伝統のものより多い。また重視しなければならない問題は、四五十歳以下の多くの人はこの行事の文化根源を理解していない、ただ幾らかの表象を捉えるだけである。このままで行けば、行事は毎年開催されるが、伝統文化は年々失われていく」と述べ、民族文化を小学校低学年の授業で取り入れて教育し、⁽³³⁾ 中学校高学年にはブイ族の歌を教えるなど色々提言している。民族文化を学校の授業に取り入れるのも有効的だと考えるが、これについては今後注視していきたい。もちろん、查白歌節は地元政府の主導、引導によって絶えることなく継承されていくと思われるが、伝統と現代的要素の均衡においてはこれから現代社会に合わせた道を模索しなければならないと思う。

- 注
- (1) 鈴木正崇・金丸良子『西南中国の少数民族——貴州省苗族民俗誌』(古今書院、一九八五年)、土橋寛『古代歌謡をひらく』(大阪書籍、一九八六年)。
- (2) 『布依族簡史』編写組『布依族簡史』(貴州人民出版社、一九八四年)。
- (3) 『布依族文学史』編写組『布依族文学史』(貴州民族出版社、一九九二年)、人口は国家统计局(<https://www.stats.gov.cn/sj/pcsj/rkpc/6np/index.htm>)、二〇二四年八月十六日閲覧)に249。
- (4) 謝彬如主編『中国節日志 查白歌節』(光明日報出版社、二〇一四年)。
- (5) 中国非物質文化遺產網・中国非物質文化遺產數字博物館「國務院関于公布第一批國家級非物質文化遺產名錄的通知(國發〔2006〕18号)」(<https://www.jhchina.cn/art/detail/id/115f6.html>)、二〇二四年八月十六日閲覧)49。
- (6) 『中国節日志・查白歌節』、注4参照。
- (7) 『布依族文学史』、注3参照。
- (8) 『中国節日志・查白歌節』、注4参照。
- (9) 彭建兵等著『布依族文化傳統節日文化調查研究』(中国社会科学院出版社、二〇一一年)。
- (10) 吳興明修士論文「布依族地方性民俗節日成因——以「赶查白」為例」(四川師範大學、二〇一二年三月)。
- (11) 『布依族文化傳統節日文化調查研究』、注9参照。
- (12) 清・張瑛修、維漢勳、朱逢甲纂成豐四年刻本『興義府志』七十四卷(民國三年貴陽文通書局搜刻本鉛排本)。
- (13) 『中国節日志・查白歌節』、注4参照。
- (14) 吳興明修士論文「布依族地方性民俗節日成因——以「赶查白」為例」、注10参照。
- (15) 『中国節日志・查白歌節』、注4参照。
- (16) 『説文解字』(中国哲学書電子化計画<https://ctext.org/shuo-wen-jie-zi/?searchu=%E4%B8%B8&page=2>)、二〇二四年八月十六日閲覧。
- (17) 晴隆県柴馬郷毛力組から来た羅方洪氏の「教示による。山歌について」のご教示をいただき、深く感謝申し上げます。
- (18) 辰巳正明『万葉集と比較詩学』(おうふう、一九九七年)、『詩の起原 東アジア文化圏の恋愛詩』(笠間書院、二〇〇〇年)。
- (19) 『中国節日志・查白歌節』、注4参照。彝族の山歌については、梶丸岳氏の『山歌の民族誌——歌で詞藻を交わす』(京都大学学術出版会、二〇一三)がある。
- (20) 羅方洪氏のご教示による。注17参照。
- (21) 辰巳正明『万葉集に会いたい』(笠間書院、二〇〇一年)。
- (22) 『中国節日志・查白歌節』、注4参照。
- (23) 興仁県から来た蔣開明氏と王興梅氏、晴隆県から来た羅方洪氏等から話を聞いた。
- (24) 黔西南州人民政府のホームページ「查白歌節」による。https://www.gxn.gov.cn/zljz/fwzwh/201501/20150116_10630655.html、二〇二四年八月十六日閲覧)
- (25) 二〇〇五年は貴州省人民政府「貴州省首批省級非物質文化遺產代表作名錄」(https://www.guizhou.gov.cn/dcgz/fwgz/fybhcc/202203/120220314_72958022.html)、二〇二四年八月十六日閲覧)による。
- (26) 二〇〇六年は「國務院関于公布第一批國家級非物質文化遺產名錄的通知(國發〔2006〕18号)」、注5参照。
- (27) 二〇一九年十一月「文化和旅游部辦公庁関于公布國家級非物質文化遺產代表性項目保護單位名單的通知」(https://zwgk.mct.gov.cn/zkxxgkml/fwzwhyc/202012/120201206_916888.html)、二〇二四年八月十六日閲覧)による。
- (28) 二〇一三年十月三十一日「文化和旅游部関于公布國家級非物質文化遺產代表性項目保護單位名單的公告」(<https://>

- zw.gk.mct.gov.cn/zlxxxgkml/twzwhyc/202311/20231101_949474.html「二〇二四年八月十六日閲覧」に448。
- (27) 贵州省『黔西南日報』WeChat公式アカウント「中国黔西南」二〇一六年七月二十六日の記事「黔桂演三地布依青年男女聚集查白歌節飲歌熱舞」(<https://mp.weixin.qq.com/s/zgIm470orKURdC2cXmAWWQ>「二〇二四年八月十六日閲覧」)に449。
- (28) 贵州省『黔西南日報』WeChat公式アカウント「中国黔西南」二〇一八年八月三日の記事「以歌会友好時節 相約查白対山歌」(https://mp.weixin.qq.com/s/FbVQ_r9pKvIlkkrR3L_1oA「二〇二四年八月十六日閲覧」)に449。
- (29) 贵州省『黔西南日報』WeChat公式アカウント「中国黔西南」二〇二〇年八月十二日の記事「非遗传承看直播今年 查白歌節、圓滿閉幕!」(<https://mp.weixin.qq.com/s/a19K3pHl16gONaeE0j5Eg>「黔西南廣播電台」二〇二二年八月二日ニュース「黔西南新聞聯播」(<http://www.qxnd.com/folder74/folder76/folder100/2021-08-02/dhSYJObdhuwrKi.html>)、貴州日報当代融媒体集團公式アカウント「天眼新聞」二〇二三年七月十九日の記事「查白歌節不趕場 非遗傳承雲欣賞」(<https://baijiahao.baidu.com/s?id=1738764527555900715&wfr=spider&for=pc>)に449(二〇二四年八月十六日閲覧)。
- (30) 「相約查白 共享民俗盛宴—2023中国·黔西南布依查白歌節側記」『黔西南日報』二〇二三年八月十日、第二面。
- (31) 「義竜新区舉辦2024·布依查白歌節喜迎八方賓客」『黔西南日報』二〇二四年七月二十九日、第六面。
- (32) 「中国黔西南」二〇一六年七月二十六日、二〇一八年八月三日の記事による。注27、28参照。
- (33) 余未人「查白歌節、伝統与現代的交匯」『当代貴州』二〇一〇年第十三期。